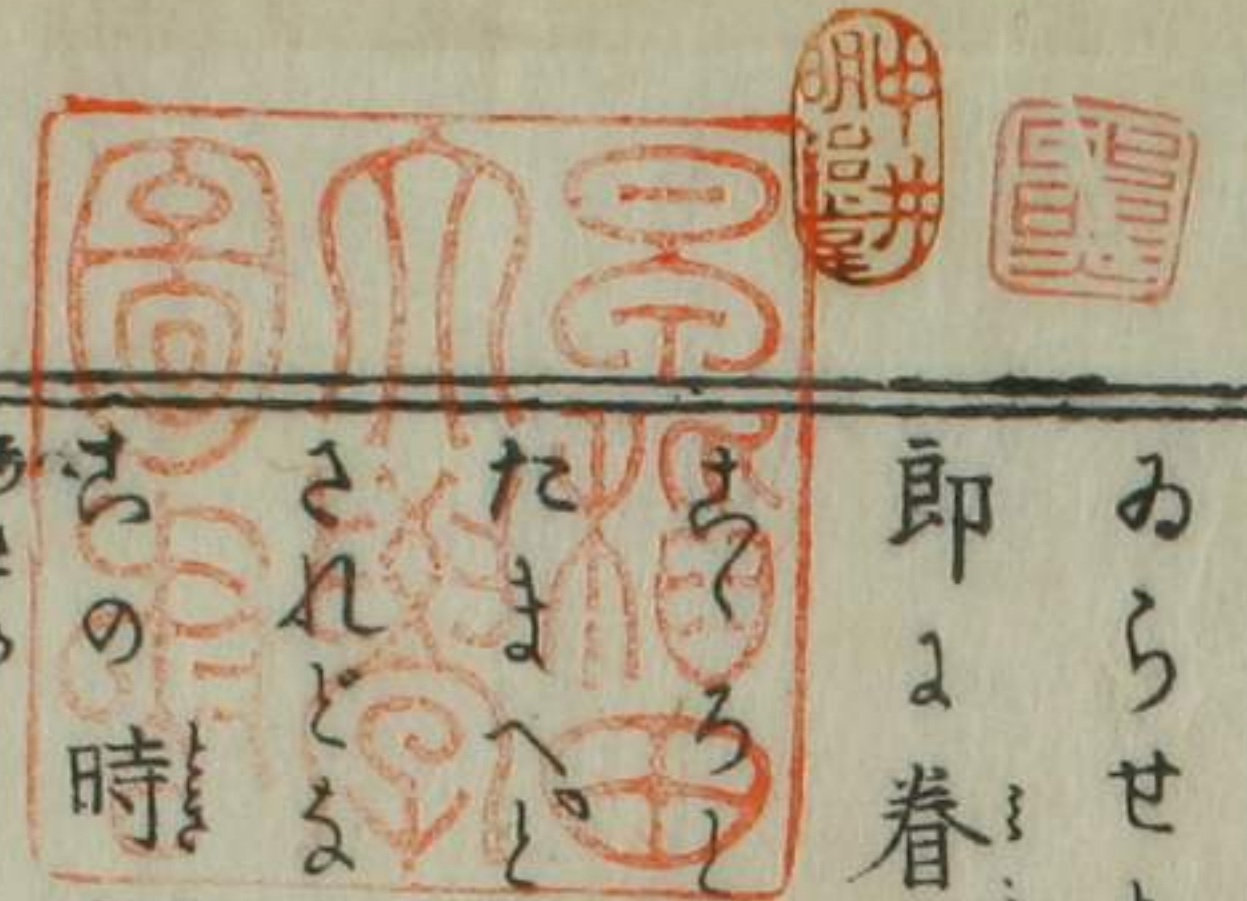


遠 13
番 962
卷 4



朝顔日記前編卷之二下冊

即ち春戀めたるし。あまはかきくうりごと顔うち額
 ありせよし。小姐ハ愉眼して。ひたれ阿蘇次
 子。さりとて。たひねうちさひぎて。こらりくるさせ
 たまへし。いふとばさへ。口ごもりて。いはづうけおす
 されど。母も。伴へる一族の奶も。すくめてやまず。
 此の時。小姐深雪ハ。何うハ志らず。了眾浅香お叫けバ。
 浅香阿蘇次郎が膝下ニ居よ。いしうらうらおる扇
 子がさーと。おまおものかいて。たまハ。さうらへ。我
 かの深窓の。こいせ。たやふと。りふ。阿蘇次郎くたんの
 扇子。かと。あぐま。バ。いっふも。姐の。あふぎ。した。ば。く。

朝顔日記前編卷之二下冊

朝顔日記前編卷之二下冊

玉手ふまきしうはる香の身小志びばりまものも
まくうられたもてうちかへし珍玩そび光輝奪目
銀地風もかとりぬそゆるふぞいふも仰まきうせぬ
その料よいとまきかくまき菊の枝とりぬ弾せたまへと
いふせちよのそとける小姐いやとら袖かとおひひ
月たとやどてくらへを乳媪の真柴阿蘇次郎おひひ
とがかとの姐々ハまだ羞澁深窓よーあをばあてし郎君
たちの前よして容易志らべたすべき適間郎君の賞
たすぬる梅の香の歌主母がちうごろ手ぬけけら
まてさうらいきそい菊の葉とたふし調子なり各ますもそ
の扇子の畫賛ぬふいたまへとあらば換兒よして主母ふ

し秘曲ぬ弾てはのひたまへとぬとあふとぬとぬ
バ母刀自りまきぬるべかひやとら調子ぬ律よとらぬかへて
いとみやとれた玉琴ぬ掻鳴しけ操りける了眾ども
ハ研めてがひ往生むくりぬ寫をまひ顔よたく大の阿蘇
次郎今い推辞ん法もぬかひの琴曲ぬ聞かから披らく
扇子小描しハた一輪の朝顔よて時よ名なる繪博士が
妙ははくせし筆のあと阿蘇次郎も一時高興よまきせて
ぬのひるよれあさうかかてら次日うけのほを
ぬとふあハれ一村雨のちうしとふまきし
とたぐとらし書くせし恰好梅が香の曲もてけれ
ば小姐ハとらぬ女房たちまきせてその扇ぬぬる

三十一
七四

小歌のさまの古雅なるハ、催馬樂しやらん、調べよや。
 くと字様のうつくしき草の葉分よまをよく、その
 水莖のよごとぬく、いとつゆけくぞ見えぬける、ひるこ
 とふうち興じて、阿蘇次郎もおほえ寸敷盃かかどぶ
 け。微酔まふ人々ふ向ひて、今日いさらずもかく御
 款待よあづかす、何酬べきよ、もかきまば、今その扇の
 繪賛よ手紙にけ、はとふき音深ときえあげ、此の興
 ともそへふんと、側よあそふ、蛇皮線かかき抱き、あじ
 調子の音どりして、やとらのど、弾る、あゝのひるまの
 あさうやなてらす、目うげのつきあきあ、あを一むらさうの
 とらしとふま、あ、ととらへ、は、弾うたよ、その声

妙よあ、い、ま、ね、ま、ま、く、人、耳、か、側、た、て、感、た、え、ず、と、ど、ろ、に、
 涙とこへ、い、ぶ、し、つ、や、と、ら、し、と、は、ら、し、と、ふ、ま、つ、し、ま、と、う、こ
 ふ、時、天、も、感、應、ま、し、し、け、ん、ま、ふ、と、の、村、雨、さ、ら、し、し、と
 う、ち、と、が、ち、水、の、う、へ、船、の、屋、根、よ、も、音、の、よ、ま、と、あ、の、雨、氣
 人の肌肉ふま、めて、いとすぐま、く、あ、ち、よ、け、ね、ま、ふ、の、時
 右、左、の、障、子、か、ひ、ら、け、ば、と、や、黄、昏、の、川、面、は、數、百、千、萬
 螢、火、の、乱、を、輝、煌、光、景、の、卷、の、説、い、や、ま、ま、と、も、ア、阿、蘇、次
 郎、屹、と、ま、ろ、つ、と、日、も、暮、と、て、婦、人、む、か、ま、の、ま、の、帯、に
 長居せんも影護た、いと、と、や、も、衣、紋、か、い、つ、く、う、ひ、竟
 日の響か、謝、し、兩、個、の、門、扉、か、い、そ、ぐ、た、て、と、く、と、う、舟、へ
 乗、う、つ、ま、ば、人、々、名、残、か、ね、し、と、ける、こ、ま、て、小、姐、ハ、清、郎、と、

今日半日の圓居して、こや十年も馴染しあつち。けし
 とうまていいつの時心のたけぬありさんとせんども
 ぬきねもひして、秋水もうち潤うかゝとぬ。袖は包めて
 浅香ぬよび。又もそやく柳うけ。浅香いとやく心ぬ
 得て、乗後をたる筑八が裾ぬひきとり。やよあひ先
 生さまの御名ぬちよとまよと記してたまはまよと筆と
 のべ紙手よ廻せば、筑八いよまよ書やまて。己が舟は飛
 のるぬまの時満江一面の螢火よて、宛も白日の如く
 ふまば。かの小姐いとのまよおほげよ。阿蘇次郎の景の
 かくるままで、掉くだす舟ぬ見送り。ごこやもせつか小見
 えとまて。遺る憾のやるかふく。おもひけそひてわそれ

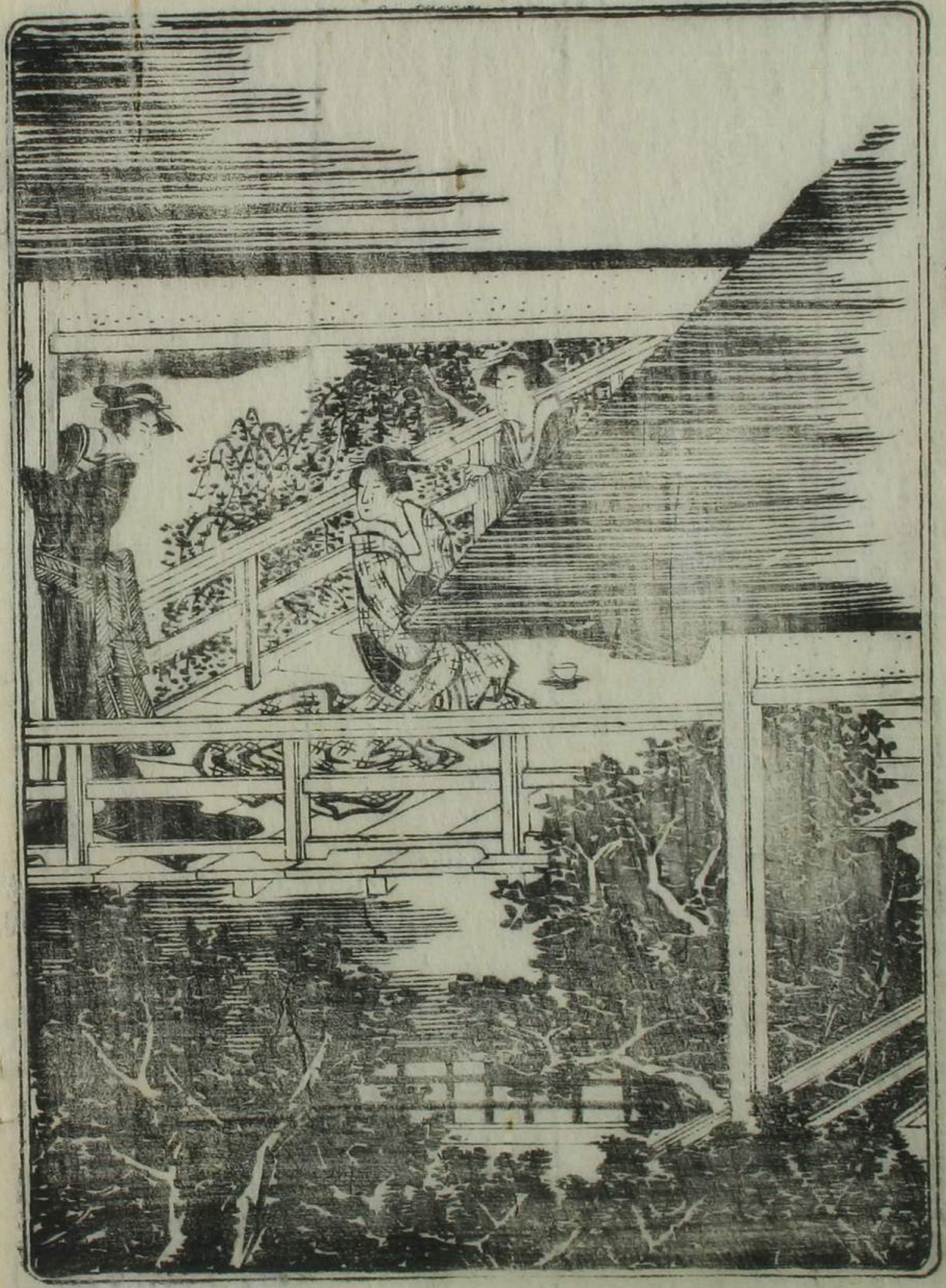
かときふたけきあつち。いふまよとまよつり。阿蘇次郎の影
 の舟ぬ漕ぬけち。いづれも俗趣ふらぬいぬけまよ。ご
 とや興盡ていそぎ前の橋詰り。あつち。やがて一個の逆
 旅店ぬたづねて、三個まよ。舎ぬあひの。沐浴ふと
 まつ。かくて檻は靠て。眺まよ。まのまよ。まよとて。こ
 柳いらふぞあまける。うち戦げる梢のいとあまやう。ふま
 まよ。たろふ。折馬東の山の端より。一輪の皓月さ。のぼる
 大と車輪のぶとく。その影。一帯の大河は映し。金の波
 ぶ。またち。山色は霏々として。黛をか。清風徐よ
 吹ころり。白露江は横たは。涼爽あ。か。ご。ぬく
 こ。ま。て。い。秋。の。天。か。と。ぞ。わ。り。い。ご。こ。か。ま。縦。横。よ。乱。ま

通旅の露
 臺の度
 松子佳
 りん



○安宅加保 卷之二

○七



○安宅加保 卷之二

○六

こびりふ百千點の螢火も赤の一痕の月のためまたちま
ちよ失致奪いま。さらかへきたる風景のまど眼ごま
ましく趣きあるふぞ。ひたをら飽ぞ望居らう。隣の架
棚よも女の声いとわがま。筑八ハむくはけよも
さーのぞけ。おねと見入たる女の顔は月光よ
そらせば。まぶやくもねた前の子衆小ぞあり。筑
八北叟咲いてま。いまと這里よても不思議は環會
てべ。まといふ。了。衆淺香あまはま。けよ前の風流客
ふてね。わした。師の師もまをらめ。よろしくやうとせせ
まへ。おろふとふし。あら。一つ房よ舎ねんものさといひ
さし。け入ら。やがてま。出来た。欄干はよちて

這方の内は張き。半身があら。諸郎もま。在。里。
明も。ま。か。と。ま。の。人。石山へ請で待るね。諸君
ふも伴ひたいてんやとら。忠吾筑八ハ渡頭ハ船のら。ち
まて。雀躍は。と。ね。く。諾。ふ。ひ。明日の約束とをね。く。
り。て。と。の。し。厨房よ入ぬ。宮城阿蘇次郎ハま。ど。夜
深。さ。に。趣。出。二。個。の。門。弟。が。汰。お。と。せ。ば。筑八。忠。吾。目。と。す
ま。く。と。や。隣。ら。う。誘。来。ま。ら。や。と。問。ま。ど。阿。蘇。次。郎
い。へ。ら。く。ま。ら。ず。い。そ。ぎ。都。下。へ。歸。ん。お。ん。い。さ。た。ま。へ
と。せ。ま。た。つ。ま。ば。兩。個。ハ。ま。ま。が。聞。て。大。は。不。興。一。宵。よ
約。せ。し。ふ。と。し。あ。ま。ば。今。日。お。ん。か。の。美。人。た。ち。と。石。山。お
ら。ち。は。ま。ゆ。ら。び。昨。日。よ。ま。ま。と。ま。て。有。趣。か。る。べ。し。先

生も。今日まけて、吾傳と閑要せたまへとひたす
むまど、阿蘇次郎頭がうちあうて、歡樂の時を得て極
むべし。窮士ハ寸陰が惜むべしと、その情といまじむま
忠吾筑八いせんとべあう、ふうく望が失ふひて、まふし
師匠の跟ははき、都がこして回らるる。

六回 蘭

宮城阿蘇次郎が、鬼道の川舟は奇遇はる。女房たちの
素姓が委しくたづぬま、筑紫ぬる。大宰小貳殿の浪士
秋月弓之助が宅眷なま、弓之助が渾家と水青といひ
女兒が深雪とふん喚ける。那の弓之助國が挂冠此の
瓜葛と托きて、洛陽まのぼま、岡崎村は隠を拙々、弓

之助生得て、その相貌堂々文武の才が無全刺へあのが
名まあめて精兵の譽世は高し本國筑前は在ましとれは
大宰家は仕へて、二十八百石の秩禄がとま、一隊長とほとあ
しとぞ、もとより大祿の餘光よて、かく陸沉の身ふぬま
ても、繁く内福ぬる過活よて、夥の婢僕がも使ける。昨日
ハ箸饗家の雜色ある一族の内室とも誘ひて、宇治の螢
見ままかまたらふま、さてあの弓之助が退仕したる縁故と
しつ、ままよました、大宰家の健卒は足柄傳藏しつ、
そのあま、渠が一個の妹は和蘭とて、天賦ついたる雪落も
の、もとより八九分の顔色あま、あの和蘭いつの比よまう
たふし藩中の騎士、花園山十郎と密通がふしつ、その

家もと貧かそけもバ、山十郎とそふふまで些の人情と
 使てそつぎける。傳藏ハもとよも不良ものふまバ自己
 が榮利が貪まで。蘭が山十郎と通せしとハ、さうぞ顔
 小ぞうちをぎける。阿蘭ハ形のおとを淫婦まで。また
 志も小野右近とつみ武人ふも契がこめて。ふくいひハ
 せしうバ、那の右近おらんが色よめでまどひ。おまを百年
 偕老の老婆よせんと。門戸不對姻婭ふまバ、や乾又と
 つもものとおしらへ。むまぐ傳藏とも量て程ちうき小迎
 娶んと。その支度とをいそ死ける。花園山十郎その催と
 聞とひとしく勃然として震怒。傳藏がせめしたて。お
 蘭いせいこがかとへ。さうしうけをバ、八幡武士道たちが

たしと。さんぐ小いひのまゐる。右近ハまゝ約束せしこと
 といひ。とままかくまも。蘭のこが妻おると。双方ますし
 いひつのは。とあらバ又銚よて取て見せんと。共小意氣地
 なたてぬく小ぞ。またしに旁輩どもハ、三四十人斗はも。
 互ひよ荷擔がさし向敵手を討果し。蘭がむむひて
 立退んと。晝夜両家よりち集ひて。今や切ていでんと
 犇りきける。老分の人々中お入。嘯ひ見とども。おのく
 馬耳風よ聞か。咄嗟大騒動よおよばんとす。その比
 筑前の國主。大宰小貳殿御他界あまで。世子龍壽丸
 君いまだ幼少なハ、けるゆへ賢女のとこえある後室
 紫光禪尼。簾子たまで。政がきりせらとぬ。尼公おとびの

淫婦阿蘭
 花岡山十郎
 小野右近と
 討果さん
 双方荷槍の
 人ありて大
 騒動不及い
 けり秋月
 引之助雲光
 禪尼の令と
 うけこれと
 濫む



〇三十一
 〇三十二

〇三十一
 〇三十二

〇三十一

騷劇とふくおどろかせたまひ。物馴てうわぐり
ものかまばとして。いそがしく。秋月弓之助が釣座を呼
出さる。今度の騷動。汝が隊下のものおほしとまきく。
いちやくその場よむた向ひ。無事よとてあづらよと
の上意ねて。弓之助か。まよて。直に馬が飛せて。
鬨争の場よ馳ゆきける。ふの時双方白刃うちふて。
己よ巷の戦よたよじんとて。弓之助ハ馬が真中よ
のまはれ。後室よまづうて。背よこし来し御家の令
旗がぬき。つて。前後左右が麾ぬき。上意しと叫ばる
ける。おまが見て。さしをよ乱をさげ。徒黨のもの
ども。にちまちと颯と。東西よものこりして。各く地小

ひさまづきて。令がまきく。弓之助馬上よ大音上。御
幼君がいかまろふ。譜代恩顧の身分として。上の御
為がかりへます。私の遺恨よよと。ごものおらぬ一命
が果さんとい。重々の不忠ねて。きつと先非が改いべし。
まつと傳藏の蟄居よりけけ。蘭ハ尼とふし。一生
縁付がゆるとす。かくまは双方の武士たちふん。御代が
いその初めなまは。ふのたびの罪が問をす。寛仁の御制
度がたけけおとむひ。とまやうよ和睦がふして。
ふまよて忠勤がけえりへ。上意と称して諭しける
小。山十郎がとも。右近がとの荷擔人も。ふりくその道理小
伏し。且尼公の御仁心が感。蘭だよあらく仰付らる

うへい。こましくべりふ夾こむべき意地としてもさうらはず
 と。さしもの乱逆たちどころふまづまゝに。全たく弓之
 助が一時の機變ふよるものぬ。かゝて弓之助登城さ
 て。まのよし後室へ伏票あぐをば。紫光禪尼御感ま
 さまし。御褒賞あてて。祿あまたとらせたまひぬ。その
 後世子龍壽丸殿御元服ありせらる。累代の箕裘を
 ほご。故のおとく。大宰の小貳に任ぜらる。たす。まの
 新小貳殿一日鷹野に出たまひ。一陣の雲が志の
 かん。と。こづつふあてり。三四人の近従のこが志たづへ
 御手小鷹が居とせらる。とある菴室に入らせたまふ。
 小戸ぞぬ裏頭よ。い。田爐の茶ふきふがきて。ある。い。

いづちへ行けん見えごまけり。小貳殿主従ハ志の庵の竹
 椽は尻いけてやとらいたす。さうら雨も小やま。た。ま。
 雌手ふる山脚よ。袖笠して下を来たる。い。い。と。う。ら
 こり。女僧ぬる。御佛へ供へんと小や。寒菊山茶花ふ
 ど。と。い。ま。た。る。阿闍桶と手小さげつ。志の女僧督と
 見るよ。こが庵よ。息ひたま。御方。い。さ。も。け。た。り。女。御。打
 伶ぬ。正しく國司よ。猜せ。う。バ。あ。た。ふ。と。垣根。よ。つ。く
 こ。い。ける。小貳殿ちらと見たまひ。う。が。ふ。う。く。懸。想。ま
 ま。ま。し。や。と。ら。た。ち。来。て。か。の。尼。側。よ。ち。う。よ。ま。た。ま。ひ。
 面をあげよと仰とるよ。女僧いとこづか。い。げ。よ。顔
 とこ。い。あ。げ。て。背。向。へ。る。そ。の。さ。ま。ふ。ど。く。玉。貳。欺。む。

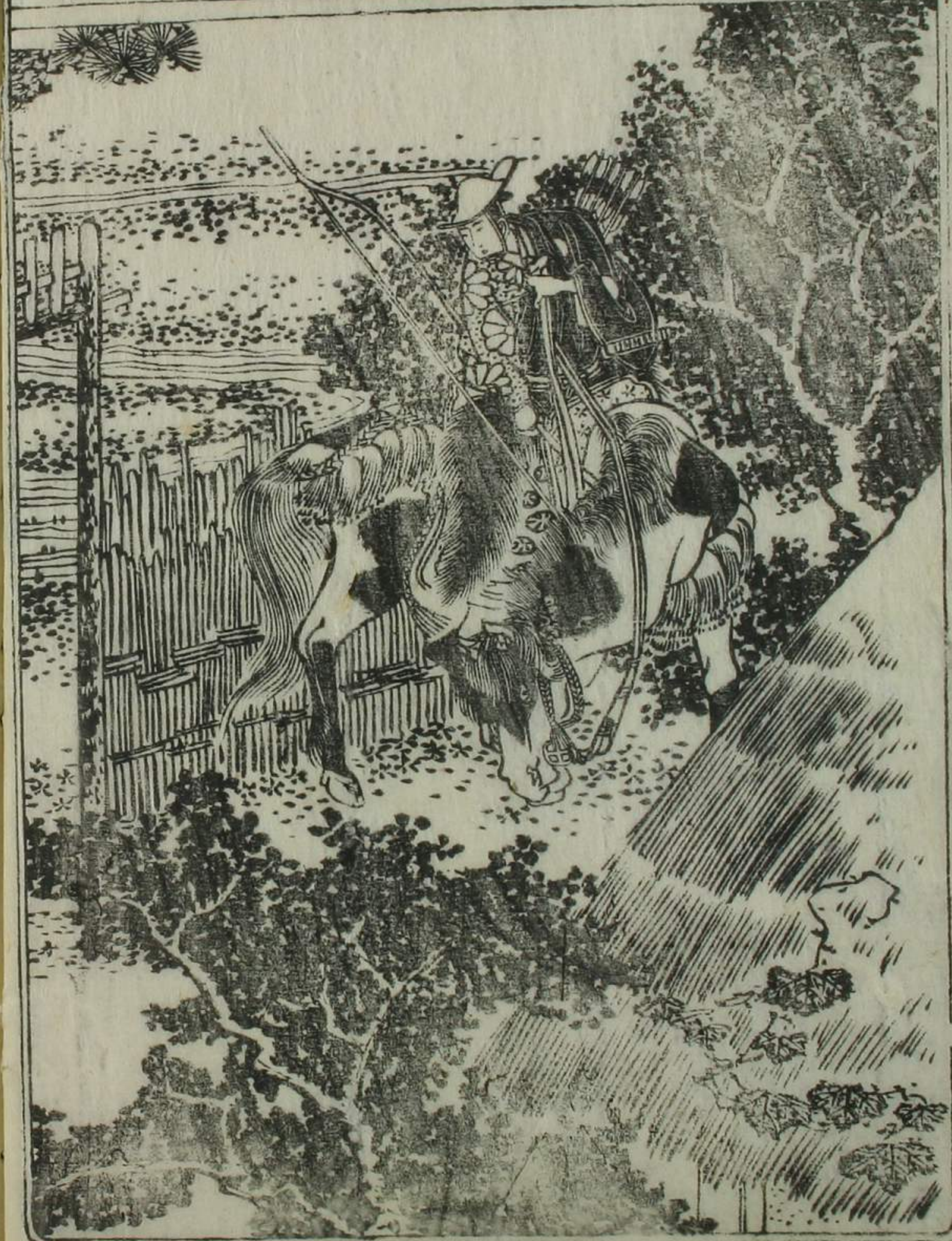
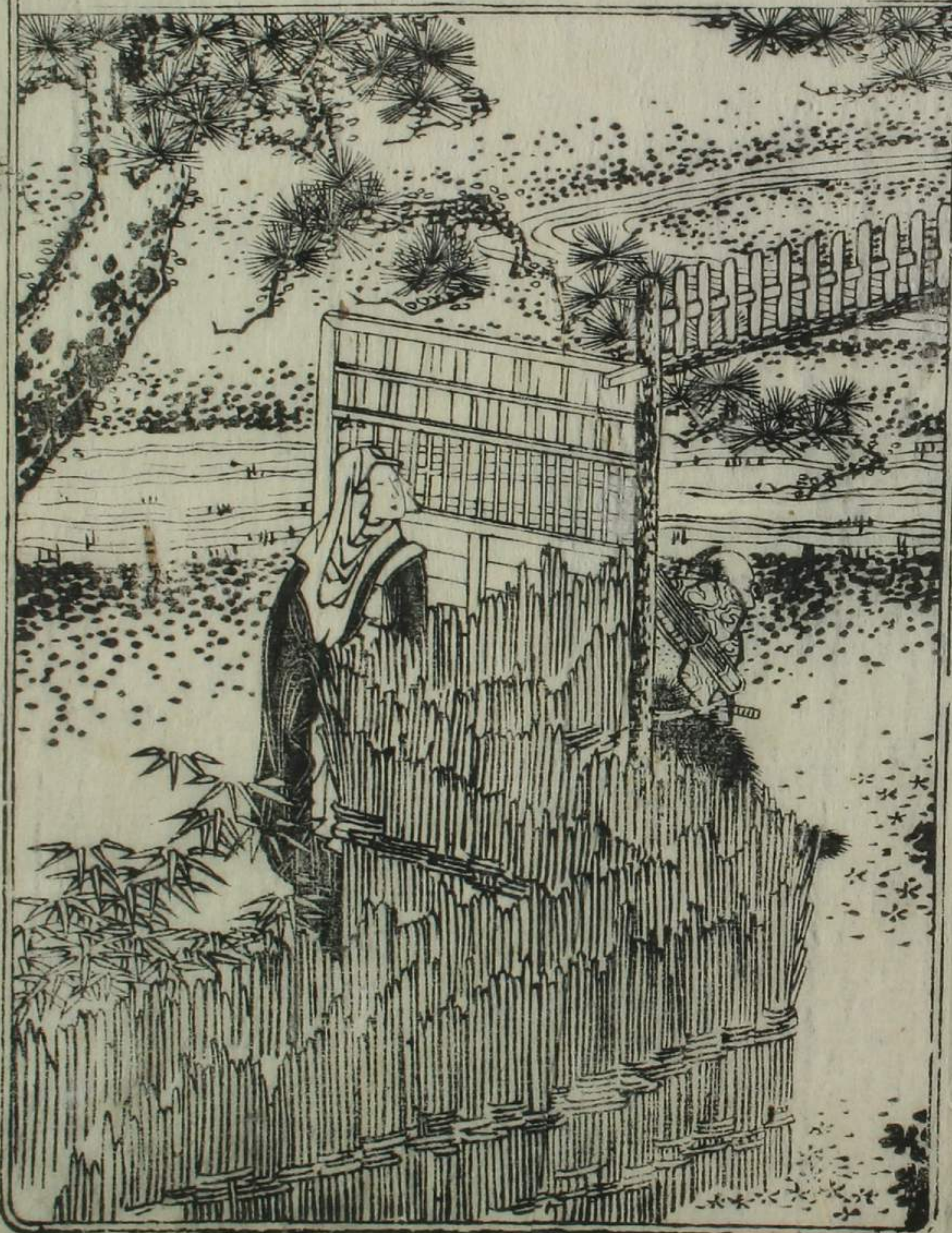
はうてぬる。梨花一枝春雨沾帯と云態よていまの雨
小そがぬきて、あいをふたとやごたるそのすづと、墨のこ
ろも綾錦よて媚きたる小貳殿名いぬよと云と
問はせたまへば、惠春と申世捨人よとべるといり、殿
御還るこの道くも進従よかたらせたまふ、惜べし絶
代の佳人よの草莽よ埋りてんあはと云、さるふてもか
かる美人のいっねるゆへ小尼といふあていぶく、さよと
心あてげよのたまはとまば、かひくしせつきたる。御供の
うら小知人のあてて、あまふその、足柄傳藏と云うと健
卒が妹よていと聞あげたる。殿うぶづらせたまて、それ
ふそ往年大乱のとてい、いっねる女よとあまの、まうく

騷動よあまびとと久く不審くまごて、いっねる、あま
不どの標致かまびとあて、いっねる、あま、いっねる、あま
ねぼしける、やうてかの惠春が帳内ふゆさせたまひ、た
小還俗させらまて、さとの名ふあらためさせ、御側室とい
いばうせたまひける、外面似菩薩内心如夜又と説を
たるがぶとく、あとの和蘭の方、顔むせのあてぬるふ、似げ
ふくも、その心いとあどろく、ま、奸才まと類かうて、れ
ば、倭媚ともて君の心は蕩うたてまはせ、ひとて寵愛
が専小せしうべ、殿何とがふして、あらんが悦ばせんと、
いっねる、あま、いっねる、あま、いっねる、あま、いっねる、あま
傳藏もよて、梟獍なるものぬま、己よ諂らふものぬ

瞿負して首尾とほくろひ骨鯁の人な仇讎のふとく
 忌憐おとが諛ひかまへあるの罪よおとしあるの黜ぞけ
 まりべ。世ははるくハ小人の習俗ふて。おの傳藏り當路
 小希旨榮利と得んと望むものも多かり。あつよ。芭
 虬太夫として。一千石の祿を給はる。おまも隊長な勤り
 ちづ。一子虬之進がたゆよ。一個の美女なもとりて。お
 まが新人よせんと。多方心な費せし。ある氷人さ
 たて。足下のもとりた。注文よかかひたる風流女こ
 とへらんかま。秋月弓之助が女兒深雪といふものおと。世
 ふとくきたる標致かま。鉄の鞋と踏破て。日本國を搜し
 るこむるとも。おまより外。おひあるべうもか。いとほま

まう小とくりけま。バ。虬太夫父子ハその人からをり
 よ。見もし。聞しせし。ゆへ。頻々懇望よおとひ。氷人
 きて。秋月家へいひ入まけるよ。實明緊の弓之助。ヨ比
 色親子がひと。おまな悪。且その門風なもい。おま
 居ま。バ。い。て。た。や。そ。く。氷人。が。花。言。巧。語。な。う。け。ひ。く
 べき。百般事。虚托て。固辞とぞいひ。かちける。虬太夫
 へ。おと。おま。の。や。ろ。か。た。か。く。暗算。や。が。て。當。時。日。の
 出の足拙傳藏よし。入。重く賄賂な。おま。さ。ま。く。追
 縦して。殿の御聲が。おま。と。ね。づ。ひ。秋月。が。女。兒。な。セ。が。ま。ご
 妻。の。仰。け。ら。る。く。や。う。渠。が。執。成。と。ぞ。た。の。ま。け。る。太。宰。の
 少貳殿。傳藏。さ。ま。ま。う。せて。即日。秋月。弓。之。助。色。虬。太。夫

だいら 太宰の小武
 廣隆 廣野
 小出 小出
 庵室 庵室
 雨や 雨や
 恵春 恵春
 懸 懸
 想 想



女
 卷之二

廿五

と召せらま。汝等小ハ似合ぶろの男女の児ども以持たるよ
 し門戸し相應ふまを。予が媒成もろどいそき日とあら
 るて。姫儀成そのへあうるべしと。雷霆撃の嚴命よ。此太
 夫ハよろみべども引之助ハハット。ねもひ。もとよま心よ
 ハそまねども。君命ハるびよしもく。その座ハまづ御請
 成ふして罷出ぬ。弓之助とぶく私邸へ回し。快
 快として樂まど。渾家の水青ハ氣成いため。御顔
 色の常ふらぬ。バ。いりぬ。性事ハ侍。まこと女児し
 ろともたづぬま。バ。弓之助ハ數回歎息し。新君色よ
 既。まて。佞人ともうげけたまへ。て。當家も未ふるま
 た。足柄傳藏先年の事ハ意趣。合。と。ふ。ふ。と。

て我をこづら。む。そのうへ腹あ。した。色虬太夫と執
 持上意成借て。好まどる。婚儀成ふ。か。と。む。る。ま。と。と。て
 か。と。が。と。う。ら。ひ。よ。よ。ま。り。ま。こ。と。小。奇。恠。な。り。國。道。か。り
 時ハ去ると聞い。ご。や。暇成。と。捨。ま。して。片。時。も。ん。や。く。
 たちさるべしと。ほ。も。る。憤。鬱。成。あ。う。け。ま。バ。渾。家。の
 水青も。良。夫。の。肚。裏。変。せ。し。と。見。て。け。ま。バ。あ。わ。て。も。諫
 めず。密。よ。その。支。度。を。ど。か。し。ける。一。日。秋。月。弓。之。助。ハ。月
 番の家老の邸。よ。いた。ま。し。一。通。の。封。章。成。玄。關。ま。こ。し。と。記。
 古實のおとく。隊長の備正。し。く。鉄。鉋。と。ま。火。繩。の。も。の
 と。丸。右。ふ。う。た。せ。家。春。成。後。陣。ま。か。ひ。せ。つ。ま。づ。く。と
 瀨。臺。成。起。程。ける。殿。ハ。弓。之。助。が。封。章。成。御。覽。ご。る。小。

己が不足ないひからべ、押て暇をと捨し、言語道断の
 曲事ふりと。以ての外は怒らせたまひ。追手をかけよ
 といとまたたまふと。御母堂紫光禪尼慌て殿かなだ
 め、漂が舊功どもな叙らまて。こころぬくともめたまひし
 のへ。弓之助ハ事故なく、筑前の國なひさとして、家眷と具
 ちて、去の京よのぞり来た。今の岡崎の莊院に購得
 て、移て拙てぞ居た上ける。あまはこし前の話なりども。
 因およきてあふ志も次。

阿佐加保日記卷之二 終



